

文章題テスト・小説(5)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

台風が近づいていた。古い木造もくぞうの家が、ミシミシゆれてきた。大つぶの雨が、茶の間のガラス戸に強く打ちつけている。

の夏休みだというのに、泳ぎにも行けやしない。外にも出られない。カちからがあまって、ため息ばかりついていた。

多くの名前は、黒崎くろさきタケル。小学五年生。家は、茨城いばらき県の太平洋に面した港のすぐそばで、代々、漁師りょうしをやっている。

港に船のようすを見に行った父ちゃんと兄ちゃんが、雨ガッパをびしょぬれにしてもどってきた。母ちゃんが、父ちゃんにタオルをわたしながら、心配そうにたずねる。

「港はどうだった？」

父ちゃんは、日焼けしてしわのよった顔に白い歯を見せ、おちついて答えた。

「ああ、ロープを何十本もわたして、ぜんぶの船を固定してあるからだいじょうぶだ。もうすぐ台風は行っちゃまうだろうしな。明日は、まだ波が高くて漁はできないが、あさってはでるぞ、マモル。」

かみを金髪きんぱつにそめた兄ちゃんが、「よっしゃ」とうなずく。こういう男どうしの会話って、かっこいい。「海の男」っていう感じがする。

それでぼくは、思わず父ちゃんにかけよると、まっすぐ目を見てたのんだんだ。

「じゃあ、こんどこそ、ぼくも船に乗せてよ。いいだろう？ 五年生になったんだもの！」
小さいころから、漁にでる船に乗りたくてたまらなかった。五年生の夏休みになったら乗せてやる、というのが、前2からの約束だったんだ。

「うーむ。そうだな、そろそろいいか。だが、じゃまだけはするんじゃないぞ。漁はタイミングが勝負だから。」

「はい！」³

全身がピリピリするほどうれしい。とうとう、ぼくも漁にでられるんだ！

(高橋たかはしうらら「シラス漁にチャレンジ！」より)



